

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2019年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	文学部・教授	菅谷 憲興 印
研究課題	フランス・ポストロマン主義の研究	
研究期間	2019年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 410,000円 / (採択金額) 410,000円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、フランス十九世紀中葉、とりわけ第二帝政期(1852~70)の文学を、世紀前半のロマン主義との複雑な関係性においてとらえなおし、この時代の思潮をあらたにポストロマン主義と定義することにより、従来の文学史的な見取り図を刷新しようという試みである。十九世紀前半と後半の間の断絶を強調するこれまでの文学史的定説の抜本的な見直しをはかり、フローベールとボードレールに始まり、マラルメにおいて頂点に達するとされる「現代性(モデルニテ)」の文学がいかにロマン主義の延長線上に成り立っているかを示すことにより、最終的には、フランス十九世紀文学の総体を広義のロマン主義として理解することを目指す。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[フランス文学] [ロマン主義] [第二帝政]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、従来の日本におけるフランス文学研究の中心の一つをなしてきた十九世紀後半の文学が、いかに世紀前半のロマン主義との連続の中で可能になったかを再検討することを通して、文学における「現代性(モデルニテ)」の意義を問い直し、さらにフランス十九世紀文学の総体をロマン主義の延長として把握することを目指した。そのために、(1) まず研究代表者個人としては、自身の専門であるフローベール研究の側から文学史・文化史の見直しを行い、その成果を日本語およびフランス語の論文や著作として発表した。さらに(2) 国内外の複数の研究者に協力をあおいで、研究会と公開講演会を開催し、ロマン主義および第二帝政期の文学にかかわる様々なテーマについて議論し、考察を深めた。以下に、(1) と (2) に分けて、より具体的に説明する。

(1) 研究代表者・菅谷は、これまでもフランス十九世紀最大の小説家の一人であるフローベールの小説、特にその遺作である『ブヴァールとペキュシェ』(1880)を中心に研究をすすめてきた。その際おもに留意してきたのは、文学作品を同時代の他の諸分野の言説、たとえば哲学や政治、あるいは医学や地質学などの科学の言説との関連において読み解くことであり、一件逆説的ではあるが、「芸術の自律性」の主張のもとに生み出された文学テクストがその外部と切り結んでいる複雑な関係を一貫して問い続けてきた。今回ロマン主義に着目するにあたって、ロマン主義自体がいわば文学・美学から政治、宗教、さらに科学までを含みこんだ領域横断的な思潮運動であり、これまでの学際的な方法論が大いに役立つことになった。本年度発表した主要な研究成果は、以下の二つである。

(ア) まず、「研究発表」の②の1に記した『ブヴァールとペキュシェ』の日本語訳を出版した。500頁を超える大部の著作であり、翻訳自体は数年前から準備していたものだが、注と解説の執筆については本年度前半にまとめて行なった。この作品は百科全書的な筋立ての小説であり、農学、医学から歴史学、宗教学、さらには教育学まで、おもに十九世紀前半の多様な知の言説の引用から成り立っている。全部で訳 850 個におよぶ注を付けたが、その中で可能な限り引用のレフェランスをつきとめ、さらにそれぞれの引用の背後にある文化史的、歴史的なコンテクストを明らかにすべく努めた。これらの注を読むことにより、1840年前後のロマン主義末期のフランスの歴史的状況が浮かび上がってくるようこころがけた。また、50頁近い解説を記して、この特異な小説がもつ文学史的な意味を解明した。ちなみに、研究代表者は2021年からフランスの Honoré Champion 社から出版されるフローベール全集の『*Bouvard et Pécuchet*』の巻の編集を担当することになっており、今回の日本語訳はそのための準備作業としても大いに意味のあるものであった。

この日本語訳に付随して、文芸誌(①の1)と書評誌(④の1)に、それぞれ短い論考とインタビューを掲載した。どちらも広く一般の読者向けにフローベールの小説の魅力や十九世紀フランスの文化史的な文脈について解説したものであるが、人文学の危機が叫ばれる現在、狭義のアカデミズムの枠におさまらないこのような啓蒙的な仕事はますます重要性を増していると思われる。今回このような機会がもてたことを嬉しく思っている。

(イ) 次に、『十九世紀におけるフランス文学と生物学の知』と題されたフランス語の専門書(②の2、ドイツの出版社から出版)に、フローベールと生氣論の関係についての論考を発表した。生氣論 *vitalisme* とはロマン主義時代に流行した生命観であり、十九世紀後半に実験医学が確立する以前に主流であった理論である。フローベールは、ロマン主義、それもおもにドイツロマン派の影響下にこの理論に親しみ、そこから晩年に至るまで友人でもあった生物学者プーシェの「生物自然発生説」を支持するようになる。論考においては、フローベールの小説に見られるこの科学理論の痕跡を、作品の草稿にまでさかのぼって明らかにした。ちなみに、フローベールとドイツロマン派、およびその同時代のドイツ自然哲学との関係は新しいテーマであり、本論考を受けて、さっそくこの主題について2021年の3月にフランスの国立古文書館で開かれる国際学会「フローベールとその世紀」において発表するようにとの依頼を先日受けたところである。

(2) 十九世紀フランス文学・文化についての考察を深めるために、定期的に研究会を開催した。毎回一人ずつ講師を招き、その発表を受けて研究会のメンバー全員で活発な討議を行った。以前から菅谷が主催しているフランス十九世紀文学研究会のメンバーを中心に、常時10名ほどの参加者があった。場所はすべて立教大学ロイドホールの菅谷研究室もしくは会議室にて開催。以下、各回の概要を述べる。

研究成果の概要 (つづき)

第1回 (2019年7月13日)

真野倫平 (南山大学) 「イヴァン・ジャブロンカと歴史記述の問題」

フランス・ロマン主義最大の歴史家であるミシュレの専門家である真野氏に、最近翻訳したばかりの歴史記述に関する書物『歴史は現代文学ある』をもとに、歴史記述の方法論と歴史 (史学史) について話していただいた。

第2回 (2019年9月28日)

鈴木啓二 (東京大学・名誉教授) 「一八四八年とフランス文学」

ボードレールの専門家である鈴木氏に、第二帝政期のボードレールの詩作品が、ロマン主義の政治的な帰結として理解された二月革命 (1848年) の挫折といかに密接に関わっているかについて話していただいた。

第3回 (2019年12月15日)

クレール・バレル=モワザン (フランス国立科学研究所)、「La littérature d'anticipation, de Jules Verne à la seconde guerre mondiale : la construction d'un genre (未来予測文学、ジュール・ヴェルヌから第二次世界大戦まで)」(フランス語にて実施)

バレル=モワザン氏がフランスで行った共同研究の成果について発表していただいた。十九世紀はジャーナリズムが発展し、大衆文学が生まれた時代であるが、その一分野である科学小説 (SF) の持つ歴史的意義について議論した。

第4回 (2020年3月4日)

原大地 (慶応義塾大学) 「マラルメの世紀」

マラルメの専門家である原氏に、最近上梓したばかりの著書『ステファヌ・マラルメの世紀』をもとに、この純粹詩を標榜した詩人が、元々ユゴーらロマン主義の詩人たち、さらにボードレールの詩作品や美術批評からどのような影響を受け、どうやって独自性を獲得していったかについて話していただいた。

公開講演会 (2019年12月21日)

バレル=モワザン氏の招へいにあわせて、「研究発表」の③の1に記した公開講演会を立教大学で開催した。バレル=モワザン氏は、元々バルザックの専門家であり、このフランス十九世紀前半最大の小説家が同時代のオカルト科学、とりわけ動物磁気と呼ばれていた理論に抱いていた関心について最新の知見を披露していただいた。ロマン主義の時代における科学と似非科学、信仰が力を失った時代における宗教的なもの、フランス革命後の社会の流動性など、バルザックの小説の細部の分析を通じて、様々な重要な歴史的な問題が浮き彫りになる非常に内容豊かな講演であった。

さらにバレル=モワザン氏の講演を受けて、コメンテーターの鎌田氏からは、しばしばメスメリズムとも呼ばれる動物磁気の理論が、大革命前後のフランスの社会に広がっていった歴史的な文脈の説明とともに、バルザックの動物磁気に対する態度の両義性についての鋭い指摘がなされた。フランス語の講演 (通訳付き) だったにもかかわらず、当日は会場からも多くの質問があり、きわめて有意義な講演会だったといえる。なお、本講演会の成果は、2020年度の立教大学フランス文学専修の紀要 (2021年度3月発行) に掲載する予定である。

以上、一年間という短い期間ではあるが、日本語とフランス語でそれぞれ重要な業績を発表することができた。また、定期的に関われる研究会や公開講演会を通じて、共同研究という形のもとに、フランスにおけるロマン主義とポストロマン主義の歴史的射程に関する考察を深めることができた。本研究自体は個人研究であるが、今後、科研費その他で大型の共同研究を行うための十分な地盤作りができたと考えている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①
1. 菅谷憲興、「フローベールの晩年のスタイル」、『文學界』、73 (11)、2019.11、pp.60-61。
- ②
1. ギュスターヴ・フローベール、菅谷憲興訳、作品社、『ブヴァールとペキュシェ』、2019、505p。
 2. Thomas Klinkert, Gisèle Séginger, Norioki Sugaya (他 15 名) , De Gruyter (Berlin/Boston,) , *Littérature française et savoirs biologiques au XIX^e siècle. Traduction, transmission, transposition*, 2019, 289p. (« Mise en scène d'une pensée de la vie. Le cas des romans de Flaubert », pp. 233-246 を執筆)
- ③
1. 公開講演会「Balzac et le magnétisme (バルザックと動物磁気)」、講師: Claire Barel-Moisan クレール・バレル=モワザン (フランス国立科学研究所 CNRS-Lyon)、鎌田隆行 (信州大学)、司会: 菅谷憲興、フランス語通訳あり、2019年12月21日、立教大学池袋キャンパス11号館 A304 教室。
- ④
1. 菅谷憲興、「世界文学の前衛・中心で ギュスターヴ・フローベール『ブヴァールとペキュシェ』新訳をめぐって」(ロングインタビュー)、『週刊読書人』、3311号、2019.10.18、pp.1-3。